

あと百年いける

神戸芸術工科大学 学長

松村 秀一

Shuichi Matsumura

「本建築」は本物か？

恩師、故内田祥哉先生は二〇二五年に生誕百年を迎える世代であった。一九四七年に大学卒業と同時に通信省に入省し、その建築部門で設計業務を担当されたが、当初は木造建築ばかりで、早く「本建築」を設計してみたいと思っておられたとお聞きしたことがある。「本建築」とは鉄筋コンクリート（以後「RC」）造建築のことである。

一九五〇年代半ばには、やっと「本建築」を設計できるようになったのだが、それから三〇年近く経った一九八二年、「新建築」誌に四号にわたって掲載された内田先生の

時評が話題になった。初回の「コンクリート建築は歴史的建築物となり得るか」は次の文章から始まる。

「二・三〇年前頃までは、鉄筋コンクリート構造は理想の建築構造と考えられていた。それは耐火・耐震構造であるうえに、耐久力も百年は上回るといわれ、木造はもとより、石造や煉瓦造よりも本格的な永久

建築物を造るにふさわしい構造と考えられてきた。しかし、今では鉄筋コンクリート造建築のなかにも、風雪に耐えかねて、みじめな姿を露呈するものが多くなった。そして鉄筋コンクリート造が果たして百年もつだろうか、という疑問が真剣に聞かれるようになったのである。」

「本建築」として憧れたものが、

本当に「本建築」なのかという問いであった。そして先生はこう続ける。「事実、鉄筋コンクリート構造が百年もつという、確たる証拠があるわけではない。いうまでもなく、鉄筋コンクリート造で百年を経過したものがなからである。かつて鉄筋コンクリートが百年もつといわれたのは、十数年間の経験からの推定にすぎなかったのである。」

「証拠はあります」

さて、内田先生の時評から四〇年以上経過した今日、二〇二四年のRC造についてである。

フランスのジョゼフ・ルイ・ラン

ボーがRC製のボートを造ってから一七六年、フランソワ・アンネビックが建築構造全体をRC造とする「アンネビック工法」（写真）の特許を取得してから一三二年が経過し、日本初のRC造建築物とされる、旧海軍鎮守府から佐世保重工業（株）に払い下げられた「第一烹炊所」と「潜水器具庫」の二棟が建設されてからも一九九年が経った。国内に現存する最古のRC造建築物である旧三井物産横浜支店事務所棟は、齢一一三歳になる。

もちろん百年以上前に建てられたすべてのRC造建築物が残っているわけではないものの、内田先生が時評を書かれた一九八二年とは異なり、今や「RC構造が百年もつという、確たる証拠」はある。

RC造は何年もつのか？

最近のことになるが、RC造建築物が何年もつのかということに関して、内田先生の墓前に報告に上がらねばならない新事実を知った。



パリのシャイヨ宮にある建築遺産博物館。古代から近代までの建築史を物語る様々な建築の模型などが展示されているが、そのなかに初期RC造建築物の立役者の一人、アンネビック社の古い展示が再現されている（撮影：森田芳朗氏）

（一社）日本建築センターは、二〇一九年五月から「既存RC造建築物の耐用年数評価」という業務を行っている。数カ所のコアを抜き、その中性化深度と強度などを実施し、屋外側からの中性化が外壁などの最外側鉄筋の数%に到達するのに要する年数を、既存RC造建築物の残りの「耐用年数」として示すのである。そして、この業務で評価した案件が二〇二四年三月末までに二〇〇棟になったことから、その

結果を集計・分析して自らの「BCJ 技研レポート（Vol. 6、二〇二四年四月）」で公表した。それは、内田先生の危機感を身近にお聞きしていた私にとって、全く予想外に明るい結果だった。

評価対象になったRC造建築物の築年数の平均は四九・二年。建ってから既に五〇年以上を経過したものが過半に達している。そしてそのうえで、これから更に何年もつことを示す「耐用年数」。これが百年を

超えると評価されたものが全体の五九%をも占めたのである。確かに、サンプル数などに限界はあるし、そもそも取り壊された建物は評価対象になっていないのだからデータに偏りはある。しかし、二〇〇棟に関する事実でもある。ごく大雑把な物言いになることをお許しただけならば、既存RC造建築物の六割は築後一五〇年はもつということが示されたことになる。適切なメンテナンスを行えば、もつともつということにもなる。

内田先生は、一九八二年における「近年」のRC工事の品質に懸念をお持ちで、特に当時施工されたRC造建築物の将来を心配され、建築界に警鐘を鳴らされたが、今回の評価対象の中心はまさにその頃施工された建築物だった。だからこそ、ご報告申し上げたいと思う。

私自身は、今や建物の寿命をどう延ばすかよりも、長くもつてしまいう建物が健全に利用される、いわば「健康寿命」の延ばし方こそがテーマなのだと考えている。つまるところ人間と同じである。